



日本人の覚悟と備え ー福澤諭吉『文明論之概略』を読むー

副会長・拓殖大学顧問 渡辺利夫

インド太平洋の現状変更勢力が中国であることに疑いはありません。これに抗してインド太平洋の勢力均衡を辛くも保持する力量をもつメカニズムが日米同盟です。国際秩序を守るメカニズムが勢力均衡だという論理の基本には、古典も現代もありません。違いは、現代の勢力均衡のありようが、古典の時代に比べて格段に複雑化し、その分だけ高度の戦略的思考と情勢分析能力が必要だということです。

集団的自衛権は、個別的自衛権とセットになって全ての主権国家に賦与されている固有の権利に他なりません。中国の尋常ならざる軍拡を前にしながら、憲法の制約のゆえになおこの固有の権利までが認められないというのであれば、帰結は憲法を国民の生命と財産の上位に置くという倒錯です。

個別的自衛権をもって外敵に対処可能だと主張する者が私の周辺にもおります。本気でそんなことを考えているのかといっても、さしたる論理もなくただそういつているだけのようです。腹を立てて私はこう言います。国益の核心への侵犯がいよいよ差し迫り、それでもなお座して死を待つ国家などどこにあるか。個別的自衛権の法的な閾値を大きく超えて他国の領域に侵入せざるを得なくなる羽目に日本が陥る危険性は、国家が生存本

能をもつ存在である以上、十分にあり得る。その程度の想像力を何故あなたはもてないのか、というのですが、左翼リベラリズムのセンチメントを胸に深く刻んだその人は何の共感も示してはくれません。

アメリカの覇権の大樹の陰に身を隠し、秘やかにも安穩な人生を送ることができた時代は、もはや完全に過去のものです。戦争はいかにも非道です。山梨県の甲府市で生まれ育った少年時代、甲府がアメリカ軍の大空襲によって壊滅させられ、死線を彷徨った私には戦争が非道なものであることはよくよくわかります。しかし、ならばその非道の抑止にはいかなる戦略が最適に関心を向けないわけにはいかない。そうでなければ、人生の平仄が合わないではないか、という気分を私は拭えないのです。

福澤諭吉といえば「文明開化」なる用語を編み出し、著作『西洋事情』『文明論之概略』により維新期日本の欧化政策に絶大なる寄与をなした啓蒙思想家だといわれて久しいのですが、その福澤の思想的立脚点が「立国は私なり、公に非ざるなり」であったことを忘れてはならないと私は考えます。

帝国主義列強がアジアを蚕食する一方、支那、朝鮮がこの「西力東漸」の国際政治力学を理解できず「旧套」の中に

「壟塞」する現状を前にして、福澤は「公」(コスモポリタニズム)ではなく「私」(ナショナリズム)の強化こそが「立国の公道」であることを激情をもって訴えたのです。

人間は、他の生命体と同じくその根本においては私であり、個の「私情」こそが至上の価値をもつ、そういう存在だということができます。外国に対する場合には、必ずや同胞としての私情が湧出し、国民としての私情、即ちナショナリズムという「偏頗心」が優位を占めなければならぬと福澤は説きます。私情と言いつつ偏頗心と言うからには、普遍としての文明からは隔たる心理だというニュアンスがありますが、各国民が私情と偏頗心を露わにしている以上、自らもこれを重んじなければ国はもたないというのが福澤の主張です。

偏頗心と報国心

実は、「偏頗心」と「報国心」が『文明論之概略』のキーワードです。こういっています。

自国の権義を伸ばし、自国の民を富まし、自国の智徳を脩め、自国の名誉を耀かさんとして勉強する者を、報国の民と称し、その心を名けて報国心と云う。その眼目は他国に対して自他の差別を作り、仮令い他を害するの意なきも、自から厚くして他を薄くし、自国は自国にて自から独立せんとすることなり。故に報国心は一人の身に私するには非ざれども、一国に私するの心なり。即ちこの地球を幾個に区分してその区内に党与を結び、その党与の便利を謀て自から私する偏頗の心なり。

自国の権利を伸長し、自国の民を富まし、自国の知徳を修育し、自国の名誉を高めんと努める者を報国の民といい、その心情は報国心というべきである。報国心の眼目は他国に対して自他の差別をはっきりとさせ、たとえ他国の利益を損う意図はないにしても、自国を重んじ他国を軽んじ、自国は自国民のものとみなしてみずからひとり立つということである。それゆえ報国心とは、国民ひとりひとりの一身を利するものではないものの、国家の私利を図ろうという心情である。すなわち報国心とは、この地球上をいくつかに分け、区内に党派を結成し、党派の利益を図って自国の私利を追求するという偏頗の心のことに他ならない。(現代語訳筆者)

早速ですが、閑話休題。文頭の「権義」とは、現在でいう「権利」ですが、私(筆者)は権利より権義の方が英語の right の訳としてはるかに優れていると思います。「権」とは他に対して物事を主張したり要求したりする資格といった意味ですが、そうだとしますと、権利は「利」を主張、要求するという語感になります。他方、権義と言えば、「道義」「徳義」或いは「道理」「条理」などを主張し要求するという語感になって、より格調の高い観念を意味すると思うからです。

『文明論之概略』の結論は何か

さて問題の核心は外交です。これについて福澤は次のようにいっています。

一片の本心に於て私有をも生命をも抛つべき場所とは、正に外国交際のこの場所なり。然ば即ち今の日本人にし

いづくん
て安ぞ氣樂に日を消すべけんや、安ぞ
むい
無為に休息すべけんや。開闢かいびやく以来いらい君
臣しんの義、先祖せんぞの由緒ゆいしよ、上下じやうげの名分なぶん、本
末ほんまつの差別さべつと云いしもの、今日けふに至いたては
本国ほんこくの義ぎと為なり、本国ほんこくの由緒ゆいしよと為なり、
内外ないがいの名分なぶんと為なり、内外ないがいの差別さべつと為なり
て、幾倍いくばいの重大じゆうじやうを増あしたるに非あらずや。

現在の日本人が、真剣な心をもって財産と生命をも投げ打つ場所とは、外交の場に他ならない。目下の日本は、およそ氣樂に日を送っていられる時期ではない。どうして無為に休息などしてられようか。かつては君臣の義、先祖の由緒となり、上下の名分、本家末家の区別などが重要であったが、現在においては日本国の義、日本国の由緒、内外の名分、内外の区別へと問題の重要性が変化しており、しかもその重要性は旧時代に比べてはるかに大きいものとなっている。(現代語訳筆者)

その上で、日本の独立が目的であって、文明はその「術」であるという『文明論之概略』の結論部に入ります。何より重要なことは何かと問うて、福澤はこう言います。

目的を定めて文明に進むの一事あるのみ。その目的とは何ぞや。内外の区別あきらかを明わがにして我わが本国の独立を保つことなり。而してこの独立を保つしこうの法ほかは文明の外ほかにに求むべからず。今の日本国人を文明すずしに進すすむはこの国の独立を保たんがためのみ。故に、国の独立は目的なり、国民の文明はこの目的に達するの術なり。

目的を定め文明化の方向へと進むよ

り他に日本の方途はない。その目的とはいったい何か。内外の区別を明らかにしてわが日本国の独立を確保することである。しかし、日本国の独立を保つための方法が文明以外にあると考へてはならない。現代の日本人が文明の方向に歩みを進めるのは、日本の独立を確保するだけのためである。それゆえ、国の独立こそが目的なのであり、国民の文明はこの目的を達成するための方法なのである。(現代語訳筆者)

「国の独立は目的なり、今の我わが文明はこの目的に達するの術なり」というのです。『文明論之概略』で福澤は、「文明の物たるやを至大至重、人間万事皆この文明を目的とせざるものなし」といった類の表現を何度も使い、人類が到達を目指すべき極致が文明であることを繰り返して述べております。

実は、この福澤にあっても、文明は到達すべき「極致」なのであって、すぐにこれが手に入ると考えるほど容易ではない。文明の極致を目標としつつも、目下の最大の課題は独立であり、この独立のための手段として文明を捉えるべきである。思考の順序を取り違えては絶対にならない、というのが福澤の思想の根本です。

最高のモラルとしてのナショナリズム

『文明論之概略』の最後にいたりますと、「丁丑公論」や「瘠我慢之説」に直結するような次のような一文に出会って驚かされます。明治8(1875)年の『文明論之概略』において福澤は既にこう言いっているのです。合理主義者福澤の面目躍如めいらくじよの感ありです。

じゆうい やから いえ ただ
暗殺攘夷の輩と雖ども、唯その事

業をこそ答むべけれ、よくその人の心事を解剖して之を検査せば、必ず一片の報国心あること明に見るべし。／されば……君臣の義、先祖の由緒、上下の名分、本末の差別等の如きも、人間品行の中に於て貴ぶべき箇条にて、即ち文明の方便なれば、概して之を擯斥するの理なし。唯この方便を用いて世上に益を為すおよと否とは、その用法如何に在るのみ。凡そ人として国を売るの悪心を抱かざるより以上の者なれば、必ず国益を為すことを好まざる者なし。

暗殺攘夷にうつつをぬかしている連中といえども、その行為は法にそむいている。けれども、彼らの心中に分け入ってみれば、必ずや一片の報国心がないはずはない。それゆえ、君臣の義、先祖の由緒、上下の名分、本末の差別などといったものも、人間の品行の観点からいえば貴いものばかりであり、それゆえこの道徳は文明化の手段としてそれを否定してしまうのはいかにも理屈に合わない。これらを世の中に役立つものとするか否かは、その用い方のいかんによろう。国を売るような悪人であれば話は別だが、そうでなければこれらの者も必ずや国益を増強するうえで役立つことができるにちがない。(現代語訳筆者)

『文明論之概略』の基底にある観念をさらに縮めて一、二言で言ってしまうえば、次の通りです。文明というものは、本来が際限もなく広かつ高尚なものであり、欧米列強は日本に先んじて文明化の道に歩を進めているものの、文明と言えるような段階に立っているとは到底言えない。各国が獣のように荒々しく戦い、国益の暴力的な拡大を求めてアジアへの侵略と植民地化を競い合っているような状況が列強の文明の現段階だと考えるならば、日本だけが広大で高尚なる文明を求めようといっても、そんなことが可能はずがない。

それよりはるか以前、何よりも国家の独立こそが求むべき緊急の課題であり、文明とは、日本にとってみればこの課題を解決するための方法なのである。それゆえ国家に対する私憤つまり「偏頗心」や「報国心」がここでは最も重要な徳目でなければならぬ。

真の独立こそ日本人の優先すべき文明なのであり、「国の独立は即ち文明なり」だということです。ここにおいて福澤は、旧時代の君臣の関係を律していた徳義が、外交(「外国交際」)における報国の徳義であり、つまりはナショナリズムを最高のモラルだとして位置付けているのです。